

# 人物の考え方や生き方をとらえよう —「わらぐつのなかの神様」(小学五年)—

静岡県静岡市立南部小学校 泉 真

## ゴールを意識して単元に取り組む

この単元で自分たちが付ける力は何なのか、付けたい力は何なのかを明確にし、児童と共通理解をする。私はよく単元の頭にあるリード文を大切に扱う。

## 登場人物の相互関係を「読むこと」

新学習指導要領では、物語文の【読むこと】の目標は、「①登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、②優れた叙述について自分の考えをまとめることができる」となっている。

①今回の改訂で「相互関係」という言葉が入ったことから、「わらぐつのなかの神様」(注)では、おみつさんの心情、マサエの心情を考えることで終わりではなく、おばあちゃんとマサエのわらぐつに対する考え方の違いを対比させたり、おみつさんの考え方と町の人達の考え方の対比をさせたり、おみつ

さんと大工さんの考え方との共通点を考えさせたりということを意識して授業を行った。

この物語で大きく心情が変化するのは、マサエである。初めの場面と結末の場面ではまったく違った考え方をしている。「マサエを変えたものは何だろう」という児童からの疑問を軸に昔がたりの中のおみつさんや大工さんの考え方や生き方に切り込んでいった。

②優れた叙述については、「わらぐつ」や「雪がた」といった小道具、印象的な台詞や態度、色といった暗示的に登場人物の心情を表現している部分に気づかせたいと考えた。例えば「わらぐつ」に象徴されるおみつさんの人柄であるとか、直接的でない表現の「いつまでもうちにいて、おれにわらぐつを作ってくれないか。」という大工さんの台詞である。笑い話ではなく、「うちにきて、わらぐつを作ってく欲しい。」「家族の分まで作ってくれたら嬉しい。」とわらぐつを作るためにうちに来て欲しいと読んでいる児童もいる。

また、現在か

ら入って、登場人物の昔がたりというかたちで話をすすめ、終わりにまた現在と結びつける手法や、また今ままで三人称で語られてきた人物が、結末で突然語り手に変化するという手法を構成の巧みさ

と考え、その手法についてどう考えるかというのを児童に発問した。「おばあちゃんが最後まで自分のことだと言わなかったのはどうしてだろう。」といった発問には、「おもしろくないから。」「マサエに興味をもってもらいたかったから。」「自慢話だと思われたいから。」と様々な考えが出てきておもしろかった。



## 「伝え合う力を育てる」話すこと・聞くこと

本校の研修テーマは「響き合いのある授業」。そのために「伝え合う力を育てる」ことを日々の研修の軸に置いている。今回の学習指導要領改訂でもこの「伝え合う力を育てる」ことは継承されている。話すこと・聞くこととのステップを職員全体で話し合い、児童たちと共通理解をしている。「今、みんなが身に付けていく力はこれだよ。」と教室にも掲示しておいてある。また、互いに伝え合い深め合うために、今回の単元では全体での話し合いの前に四人グループでの話し合いを取り入れた。話し合うことで班の意見をまとめるということではない。自分の意見を価値付けたり、違った価値感、考え方に触れたりする場面を設定することで、より多くの児童に伝え合うための準備段階を作った。また、四人という数字にもこだわっている。脳科学者によると、「人数が多ければ多いほど効率がいいと考えられるのは間違っている」という。人数が



多いと社会的な手抜きを無意識に始めるそうだ。それが始まるのが五人からという。脳科学の側面から見れば、少人数で話し合う場合、一番適している人数は四人である。実際に、四人だと全体では話さない児童も口を開くようになった。

話すためには「自分の思いや考えをもつ」ことが必要になってくる。基本はノートであると考えているが本単元では書き込みノートを使用し、毎時間その書き込みノートに考えを書かせた。サイドラインを引かせたり、書き込みを加えたりと、考えをもつための時間を確保した。

また話し合うためには、必ず「聞く」ことが必要である。新学習指導要領の指導事項を見ると「自分の意見と比べるなどして考えをまとめる」とある。比べるためにはまず聞かなくてはならない。「目、耳、心で聴くんだよ。」という約束を児童と確認し、特に姿勢を意識させてきた。うなずき、相づち、返事ももちろん大切で、聴くことの大切なスキルであることは話しているが、脳科学の見地からも姿勢が本当に大切である。話し手を見て、姿勢をよくすることを心がけてきた。

### 考える国語へ

これまでは、文章に書かれている内容、構

成や表現の工夫、考えや意図などを教師が児童に「理解させよう」としてきたことが多いと思う。しかし、これからは単に知る、理解するというだけでなく、この文章に対して自分はどう思うのかといった「考える」ことが求められるのではないかと。本単元でも「結婚を決めたおみつきさんをどう思うか。」という問いを投げかけてみた。当日、力量不足の私の言い回しの違いやそれまでの読み取りから、児童は困惑していた。また、こうした「文章に対してどう思うのか？」という自分の意見を聞かれることに慣れていないため、何を書いたらいいのか戸惑う児童もいた。文章に対して、筆者の意見に対してなど、「自分はどう思うのか」ということには児童にも、教師にとってもこれからの積み重ねが大切であると感じた。

注 「わらぐつのなかの神様」

（『杉みき子選集（1）』新潟日報事業社）

いずみ まこと 静岡県静岡市立南部小学校教諭。本校研修テーマ「響き合う授業」に向け、日々教師修行中。